バーミヤーン出土のイスラーム陶器

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 達夫, 佐々木, 花江, 野上, 建紀 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/9806

バーミヤーン出土のイスラーム陶器

佐々木達夫　佐々木花江　野上建紀

はじめに

バーミヤーンは東西交易路の要衝として栄えた宗教都市といわれる。ヒンドゥークシュ山脈中の標高2500メートルの高地の盆地に遺跡が残る。バーミヤーン遺跡は「バーミヤーン渓谷の文化的景観と古代遺跡群」として2003年、世界遺産に危機遺産として登録された。自然劣化や崩壊、略奪や盗掘の危機にさらされているからである。

バーミヤーンは中国では4世紀に『北史』西域伝に范陽国ハンヤンとして記されている（樋口1983-1984：3巻171頁）。また、『隋書』には615年に失范延国バーミヤーンの使節が朝貢したと記され、『唐書』、『新唐書』、『唐会要』には、帆延、望衍那・失范延と記されている。629年頃に唐の玄奘がバーミヤーンを訪れ、『大唐西域記』に仏教都市として栄えるバーミヤーンの記録を残している。それには「伽藍は数十か所あり、僧徒は数千人いて、小乗の説出世部をたっとび学んでいる。王城の東北の山のくまに立仏の仏像がある。」と記されている（桑山1987）。また、726年頃に同地を訪れた慧超も『往五天竺国伝』に記録を残している。それには「寺も多く僧も多く、大乗小乗の教えをおこなっている（中略）他国に属さず、軍隊が強力なのでどの国も侵攻しようとはしない」とある（桑山 1992）。

イスラームの影響は周辺地域より少し遅れて及んだようである。8世紀中頃にアッバース朝第2代カリフのアル・マンスール時代のクンドゥズ地方総督がバーミヤーンを征服したが（前田 2005）、10世紀まで仏教が存続したと推測されている（Klimburg-Salter 1989）。10世紀にはガズニー朝、ゴール朝とも関係を持つが、1221年にはモンゴルによって滅ぼされた。住民はシャフリ・ゴルゴラに立てこもり、抵抗したが、虐殺されたと伝えられる。その後のバーミヤーンの歴史は不明な点が多い。

近年のバーミヤーンについては、2001年のタリバンによる東西大仏の爆破がまだ記憶に新しい。同年、アメリカのアフガニスタン侵攻によりタリバン政権が崩壊し、長年の内戦が一応の終息をみたことで遺跡の修復と保存に向けた動きが始まった。翌2002年に日本政府が基金を拠出してユネスコ日本信託基金を設立し、ユネスコと共同で遺跡の修復と保存に独立行政法人東京文化財研究所が中心となってバーミヤーン遺跡に残された文化財の保存事業を行っている。

Figure 1　バーミヤーン位置図

1　陶磁器調査の概要

近年、文化財研究所によるバーミヤーン遺跡の発掘調査によって多くのことが明らかになった。石窟以外の仏教寺院跡や町跡の状態も判明しつつある。これまでの調査で多くの陶磁器が出土し、これらも当時の生活や文化や交流を知るための貴重な基礎資料となるものであるが、これまで十分な整理作業を行う時間がなかった。そこで東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・地域環境研究室長山内和也と金沢大学文学部佐々木達夫は、両機関の共同研究として「アフガニスタン・バーミヤーン遺跡出土陶器の研究」を平成19年度に実施した。

2007年6月13日ー7月11日の間、バーミヤーンにおいてジューーイ・シャフル（Ju-yi Shahr）地区、タイブティー（Taibuti）地区、ガリーブ・アーバード（Gharibabad）地区、ガーズィー・ダウーティー

(Qazi Dauti) 地区の４遺跡から 2005 ～ 2006 年度に出土した約 336kg の陶磁器の調査を行った。

その結果、バーミヤーン遺跡から出土した陶磁器に関する分類作業と計量作業、実測図作成及び写真撮影を行うことができた。

２　各調査地区の概要

陶磁器調査を行った４遺跡の位置と環境を説明し、出土している陶磁器の概要を記す。遺跡の位置と環境についてはバーミヤーン遺跡保存事業概報(山内 2007) による。

（１）ジュー－イ・シャフル (Ju-yi Shahr) 地区

シャフリ・ゴルゴラの北西麓、河岸段丘上に位置する。2004 年に発見されたストゥーパの周辺である。発掘調査も寺院跡調査が目的であった。2006 年の調査では第１層（耕作土)、第２層（イスラーム陶器を多く含んだイスラーム時代の遺構の覆土)、第３層（少数の土器片を含む。）に分層されている。西調査区では第２層を切り込んで大量のイスラーム陶器を含む土壙が多数確認されている。

（２）タイブティー (Taibuti) 地区

西大仏の南西側、ソルフゴレ涸れ谷の南側に位置する。「王城」関連の遺構の発見を目的として発掘調査が行われた。2006 年の発掘調査では井戸と推定されている深い土壙が廃棄穴として利用され、内部から大量の施釉陶器と無釉土器が出土している。

（３）ガリーブ・アーバード (Gharibabad) 地区

位置的にはタイブティー (Taibuti) 地区内に含まれ、西大仏の南西側に位置する。2006 年には第１調査区から第７調査区まで７つの調査区で発掘が行われている。第３調査区の南西部の畑からイスラーム時代の土器片とともに窯の壁体が確認されたというが詳細は明らかではない。第１調査区の第１ー２層、第５・６調査区の第２ー３層、第７調査区の第２ー５層などからイスラーム時代以降の土器などが出土している。

（４）ガーズィー・ダウーティー (Qazi Dauti) 地区

東西大仏の間、東大仏の南南西に位置する。「先代の王が建てた伽藍」の発見を目的として発掘調査

Figure 2 シャフリ・ゴルゴラからみたバーミヤーン渓谷

を行っている。2005 年の調査では前イスラーム時代の地業遺構が発見されている。2006 年の調査では第１層（イスラーム時代の施釉陶器や土器を含む表土層)、第２層（10 ー 12 世紀頃のイスラーム時代の施釉陶器を多く含む)、第３層（イスラーム時代の施釉陶器と前イスラーム時代土器を含む混在層)、第４層（イスラーム時代の施釉陶器を全く含まず、赤褐色土器が多く出土している)、第５層（赤褐色土器が若干出土している）に分層されている。

３　陶磁器調査の方法と内容

バーミヤーン遺跡から出土した陶磁器について、素地、成形、整形技術及び装飾技術によって分類整理した。分類整理後、それぞれの種類の重量を計測し、そのうちの代表的な器及び分析資料 237 点の実測図作成・写真撮影を行った。

製作年代を知る基準は一括出土品、同じ層位内出土品、上下の層位出土品との比較であるが、今回の調査では傾斜地及び扇状地の流れ込みによる層位が主となる遺跡が多いことを考え、製作技術と整形・装飾技術を比較することで年代を考え、層位出土品の重量比率比較を参考資料とすることにした。産地を知る基準は素地の質と色を主とし、併せて成形・整形・装飾技術及び文様を他産地と比較する資料とした。

４　出土施釉製品の種類

出土した施釉製品は碗、鉢、皿、瓶、壷などの施釉陶器と施釉タイルに大別され、そして、素地の種類によって、黄色素地、赤色素地、白色素地、ストーンペースト素地に分類される。さらに赤色素地の製

品については白化粧土の有無によって分類され、釉の種類（透明釉、黄釉、褐釉、黒釉）で分類される。一方、白化粧土をかけた製品は単色釉（緑釉、黄釉、黒釉）、多彩釉に分けられる。多彩釉は透明釉を基本とし、単色あるいは複数の釉で装飾するものであり、器種（碗・鉢、壷、瓶）や装飾技法（透明釉下彩文陶器、多彩釉彩画陶器、多彩釉刻線文陶器、多彩釉盛上文陶器）によって細分される。

白色素地の製品は釉の種類（青釉、白釉）によって分けられる。ストーンペースト素地の製品も同様に釉の種類（透明釉、青釉、白釉）で分けられる。透明釉の製品には金色ラスター彩陶器が含まれる。

施釉タイルは釉の種類（緑釉、黄釉）によって分けられる。タイルの素地はいずれも赤色素地である。

以下、各分類について説明を行う。なお、遺物図版の実測図に付された 001 ー 237 の３桁の数字は実測番号であり、仮の登録番号を兼ねている。

（分類１） 黄色素地に複数の種類の色釉によって彩色された製品である。白化粧土は施さない。鉢などがある。量は極めて少ない。ガリーブ・アーバード地区などで少量見られた。[Figure 22-161]

（分類２） 赤色素地に黄釉をかけたもの。白化粧土は用いない。碗、鉢などがある。量は極めて少ない。ガリーブ・アーバード地区などでわずかに見られた。

（分類３） 赤色素地に褐釉をかけたもの。白化粧土は施さない。碗、鉢などがある。量は極めて少ない。ガリーブ・アーバード地区などでわずかに見られた。[Figure 21-187 など]

（分類４） 赤色素地に褐釉をかけ、その上に盛上・貼付文で文様を施したもの。白化粧土は施さない。碗、鉢などがある。タイブティー地区の廃棄穴出土遺物の中によく見られる。一方、ジューｰイ・シャフル地区出土陶器ではほとんど見ない。[Figure 6-035、Figure 21-191 など]

（分類５） 技法的には分類４と同様であるが、褐釉でなく、黒釉がかけられている。分類４と同様にタイブティー地区の廃棄穴出土遺物の中によく見られるが、ジューｰイ・シャフル地区出土陶器ではほとんど見ない。[Figure 4-011,013 など]

（分類６〜 10） 分類６ー 10 は赤色素地に白化粧土を施した上に緑釉をかけたものである。この種の緑釉陶器は地区により量の違いはあるものの、最も一般的な製品の一つである。分類６は刻線による装飾をもたないもの [Figure 11-088 など]。分類７ー 10 は刻線文による装飾をもつものであり、器種によって分類７（碗･鉢、[Figure 12-127 など]）、８（坏、[Figure 7-046 など]）、９（壷、[Figure 16-118 など]）､10（瓶､[Figure 22-169 など]）に分けられる。

（分類 11） 赤色素地に白化粧土を施した上に黄釉をかけたものである。各地区とも数％程度出土している。[Figure 16-089 など]

（分類 12） 赤色素地に白化粧土を施した上に緑釉、黄釉、黒釉以外の色釉をかけたものである。褐釉、青釉、複数の色釉をかけたものや内外面掛け分けの陶器を含む。[Figure 4-010 など]

（分類 13） 赤色素地に白化粧土を施した上に黒釉をかけたものである。

（分類 14） 赤色素地に白化粧土を施した上に複数の色釉を絵具のように使って文様を描き、その上に透明釉をかけたものである。タイブティー地区の廃棄穴出土遺物の中によく見られるが、ジューｰイ・シャフル地区出土陶器ではほとんど見ない。[Figure 4-007,009、Figure 21-186 など]

（分類 15） 赤色素地に白化粧土を施し、刻線（陰刻）による装飾を施し、その上に透明釉をかけたものである。緑色や褐色、紫色などの色釉で彩色したものが多い。ジューｰイ・シャフル地区出土陶器の主体となっている。[Figure 11-079 ー 087 など]

（分類 16） 赤色素地に白化粧土を施し、盛上文による装飾を施し、その上に透明釉をかけたものである。[Figure 4-001、Figure 5-022 など]

（分類 17・18） 赤色素地に白化粧土を施し、その上に透明釉をかけた壷（分類 17）､瓶（分類 18）である。いずれも極めて少ない。

（分類 19） 分類２ー 18 の素地とは異なる赤色素地に白化粧土を施し、複数の色釉で文様を描いたものである。中央アジア(ウズベキスタン)産と推定される。１点のみ確認されている。[Figure 26- ２]

（分類 20・21） 白色素地に青釉をかけたものである。器種により分類 20（碗、盤、[Figure 24-216 など])、分類 21（小壷、[Figure 7-038 など]）に分けられる。

（分類 22） 白色素地に白釉をかけたものである。[Figure 22-174 など]

（分類 23） ラスター彩陶器である。素地は白色で白化粧土上の金属的な光沢をもつ装飾の上に透明釉がかかる。ジューーイ・シャフル地区でわずかに出土する他、石窟から出土している。[Figure 17 中段、Figure 26-1]

（分類 24・25） ストーンペースト素地に釉薬がかけられたものである。量は非常に少ない。釉薬の種類によって、青釉（分類 24、[Figure 17-146 など])、白釉（分類 25、[Figure 17-114]）に分けられる。

（分類 26） その他の素地や釉をもつ施釉陶器である。

（分類 27） 赤色素地に緑釉がかけられたタイルである。ガリーブ・アーバード地区やジューーイ・シャフル地区などで出土している。[Figure 17-105 など]

（分類 28） 赤色素地に緑釉以外の色釉がかけられたタイルである。黄釉、青釉の単色釉やそれらを組み合わせた多色釉のものがある。ジューーイ・シャフル地区で出土している。[Figure 17-126 など]

５　各地区出土イスラーム陶器の重量比率の傾向

最も違いが顕著なジューーイ・シャフル地区とタイブティー地区の比較からみていく。ジューーイ・シャフル地区出土施釉陶器の 66.7％を占める多彩釉刻線文（分類 15）の製品は、タイブティー地区では 23.0％を占めるに過ぎない。逆に透明釉下彩文や多彩釉彩画の製品（分類 14）はタイブティー地区で 42.5％を占めるのに対し、ジューーイ・シャフル地区ではわずか 0.5％に過ぎない。またタイブティー地区では白化粧土を施さない製品（分類１ー５）が 7.0％と一定量見られるが、ジューーイ・シャフル地区ではわずか 0.1％である。緑釉製品については、ジューーイ・シャフル地区が刻線文のあるもの（分類７ー 10）の方が無文のもの（分類６）に比べて多いのに対し、タイブティー地区は逆に無文のものの割合の方が高い。いずれの地区も碗、鉢主体であり、質的にも大差ないことから、両者の違いは時期差を表している可能性が高い。

そして、ガリーブ･アーバード地区やガーズィー・ダウーティー地区は、ジューーイ・シャフル地区やタイブティー地区ほどの製品の偏りは見せないが、ガリーブ・アーバード地区は白化粧土を伴わない製品（分類１ー５）が 7.8％と一定量を占める点や多彩釉刻線文（分類 15）の製品の割合が 28.1％と比較的小さい点などタイブティー地区の製品の傾向に近い。ガーズィー・ダウーティー地区は、白化粧土を伴わない製品（分類１ー５）がわずか 0.3％に過ぎない点はジューーイ・シャフル地区に近く、多彩釉刻線文の製品（分類 15）の割合もガリーブ・アーバード地区やタイブティー地区に比べて 37.8％と高い。

６　バーミヤーン遺跡出土陶磁器の特質

バーミヤーン遺跡出土陶磁器の 90％近くを土器が占める。施釉陶器は 10％程度を占めるのみである。その他、タイル、窯道具、窯壁片、近代の磁器などが含まれていた。重量比率は地区によっていくらか異なるが、おおまかな傾向は変わらない。

以下、施釉陶器を中心に製品の素地、器形、釉、装飾技術、焼成技術、年代の特徴など、今回の調査で明らかになったことを述べる。

（１）素地について

施釉陶器は赤色素地がほぼすべてを占める。他地域から運び込まれたその他の素地はきわめて少ない。土器と比べると砂粒の大きさが小さな細かな質の素地である。土器と比べると白色粒がきわめて少なく、赤色砂粒や黒色砂粒も小さい。土器は２種類の素地があり、白い大きな粒が多く混じり赤色粒も大きいもの、白い粒が小さく赤色粒も小さいものがある。いずれも現地産の粘土を使用し、器の大きさによる精製度を示すと考えても良いものである。白色粒のなかには砂粒ややや不透明の鉱物粒が混じり、石灰岩のなかに長石粒が混じるようにみえる。

（２）成形技術について

施釉陶器はいずれの器もロクロを使用して水挽き成形され、ロクロの回転は成形が左回転、高台削りが左回転である。高台作りは粗く、高台際の腰部を削ることは少ない。

施釉陶器の器形は碗、鉢、平皿、口折平皿が主である。瓶はきわめて少ないのが特徴である。口縁部はすこし窄まるもの、ほぼ直口となるもの、やや外反するもの、厚くなり斜めに切れるもの、肥厚するもの、外反し幅広口縁となるものなどがある。内面中央部は平らなもの、凹むものなどがある。高台形は一般的な輪高台、底部外底がやや上がりぎみのもの、底部外底が平坦なもの、底部外底が平坦で少し内側に円形溝を刻むもの、輪高台内に凹凸があるものなどがある。彩画陶器と刻線文陶器で、高台形と造形に明らかな違いがあり、編年基準の資料となる。

（３）釉および白化粧について

施釉陶器は内面の基本的な釉色によって、単色釉と多彩釉の陶器に分かれる。単色釉は緑釉、黄釉、褐釉及び黒釉が主となり、多彩釉の陶器は透明釉の下にいくつかの釉で文様を描いた多彩画陶器（透明釉下彩文陶器、白地彩画陶器）や刻線文を伴う多彩釉刻線文陶器などがある。出土品の多くは素地上に白化粧土が施される陶器であるが、年代が早いと推定される褐釉や黒釉などの彩画陶器は化粧土を用いていない。白化粧土を厚く内面全面と外面口縁部に施し、その上に透明釉を掛けたものが多い。釉色は白化粧土を写して白色または淡い黄色となる。白化粧土に透明釉が掛からない部分は白く、白化粧土がなく透明釉が掛かる外面胴部は赤褐色となる。透明釉下の白化粧土上には刻線文や多色または単色の彩文を描くことが多い。内面は白色でも、外面には緑釉を掛けた鉢が多い。白化粧土の白色泥の成分は不明であるが、酸に反応しなかったため石灰ではない。透明釉下彩文陶器の外面は、白化粧土のある陶器は緑釉となるものがかなり見られる。

（４）装飾技法について

装飾技法は彩文、刻線文、盛上文、貼付文があり、口縁部に花弁状の切り込みを入れるものも僅かにある。器面には色釉で文様を描く。使用される釉色は緑色、紫黒色、黄色、褐色、紫褐色、黒色、白色などがある。文様は植物文及び幾何文が主となる。ニーシャプールやサマルカンドと類似した文様を描くが動物文は少ない。10 ー 11 世紀は彩画文、12 ー 13 世紀は緑彩刻線文が主要な装飾となると推定される。なお、陶工名や工房名を示すような文字は見られず、年号も記されていない。

（５）焼成技術について

施釉陶器の透明釉下白化粧土陶器はいずれも正位置ではなく逆向きに置いて焼く伏焼である。口縁部から濃い釉である緑釉が垂れているために逆向きに置く焼成方法であることが明らかである。焼台は三足トチン、棚棒の２種類が数少ないながら各地点で出土している。窯跡が近くに存在したことを示す資料である。

（６）製品の年代について

各地点出土の陶磁器は仏教時代の土器を含むが、多くはイスラーム時代の土器と施釉陶器である。施釉陶器は 10 世紀から 13 世紀にかけて使用されたもので、その後の陶磁器の出土量はきわめて少ない。すなわち、13 世紀以降に中央アジアで一般的な透明青釉下黒彩陶器や 16 世紀以降にイランで一般的な透明釉下コバルト彩陶器（染付）は出土しない。バーミヤーンの遺跡出土施釉陶器はほぼ 13 世紀に終わり、その後は陶磁器が確認されない時期があり、そして、19 世紀以降の陶磁器が採集される。こうした状況はチンギス・ハンの軍隊によって住民が虐殺されたというバーミヤーンの歴史を反映している可能性が高い。全ての住民が虐殺されたかどうかはともかく、少なくともバーミヤーンにおける施釉陶器の生産は終わった可能性が高い。その場合、バーミヤーン出土の地元産イスラーム陶器の年代の下限は 1221 年頃と推定することが可能である。

バーミヤーン遺跡出土陶器の中で相対的に新しいと考えられる製品群はジューｰイ・シャフル地区出土製品であろう。具体的な年代については居住域の移動や採集地点の特殊性を反映している可能性を考え合わせながら検討しなければならないが、少なくともジューｰイ・シャフル地区出土陶器よりも新しい様式や技術が見られる製品の出土はみない。また、地元の骨董品屋では陶器碗が数多く店先に並んでいるが、骨董業者によればシャフリ・ゴルゴラから掘り出されたものという。それらの多くは多彩釉刻線

文陶器であり、ジューイ・シャフル地区出土製品と類似したものも多い。シャフリ・ゴルゴラはチンギス・ハンの軍隊に攻撃された際に滅亡した遺跡である。正確な出土地点に対する信憑性に問題はあるが、これらもまた相対的に新しい製品群と考えてよいと思う。骨董品屋に並ぶ製品には完全に近い形に復元できたものが多く、通常の使用過程で廃棄されたのではなく、チンギス・ハンの軍隊の攻撃の際に廃棄されたものも含まれている可能性もあるように思う。一方、ジューイ・シャフル地区と大きく製品の傾向が異なる製品群が出土している地区がタイブティー地区である。この違いが時期差によるものと推定されることはすでに述べた。

こうしたことを根拠に今回は以下の編年試案を提示する（Figure 3)。バーミヤーン遺跡から出土した陶器を大きく二つの時期に分ける。すなわち、タイブティー地区（特に 2006 年調査廃棄穴）出土陶器に見られる彩画陶器などを相対的に古いグループ（前期・中期）とし、ジューイ・シャフル地区出土陶器に見られる多彩釉刻線文陶器などを相対的に新しいグループ（後期）とする。前者はさらに白化粧土を伴わない段階（前期）と白化粧土を伴う段階（中期）に分けられるが、それらに明確な時期差があるものか、今後さらに検討を必要とする。ジューイ・シャフル地区出土陶器に代表される相対的に新しいグループもまた多彩釉刻線文陶器のグループ（後期）から透明釉緑彩刻線文陶器のグループ（晩期）へと製品が変わっていくことが想定されるが、これもまた明確な時期差を確認できたわけではなく、あくまでも現段階における試案である。後述するように他地域から持ち込まれた製品が少ないことから、共伴する中国磁器などを年代の尺度として用いることは難しい。地域内での製品の技術や様式の変遷から年代を推定していくことになる。チンギス・ハンによるバーミヤーン攻撃に伴って廃棄された可能性が高い陶器などを確認できれば、それらを年代の基準として編年作業がより進むものと思われる。

（7）他地域から移入された製品について

イスラーム時代の交易路に沿う遺跡から一般的に出土する中国陶磁器は、バーミヤーンにおいてはきわめて少ない。13 世紀以前の中国磁器は石窟から磁州窯白化粧土刻線文瓶の破片が 1 点確認されているのみである。19 世紀の福建省など中国南部で焼かれた染付碗や 20 世紀の小皿、小碗が採集されている。他地域からの移入品にラスター彩陶器鉢が含まれるがその数量は少ない。こうした点は地方色の強い地域内流通陶磁器の出土状況を示している。内陸の寒冷気候であり、陶器を現地生産していることが出土陶磁器の種類と組み合わせを決めているのであろう。

7　今後の課題

バーミヤーン遺跡から出土するイスラーム陶器の生産の実態を知るには、それらを焼いた窯の調査が不可欠である。出土遺物の中に窯道具が散見されるように発掘調査された遺跡の付近にも窯の存在が推測されるし、地域住民による窯跡の確認情報もある。窯の発掘調査はイスラーム陶器の製品だけでなく、当時の生産技術や地域的な影響関係など多くの知見をもたらすものであり、重要な作業となろう。

また、チンギス･ハンの軍隊に攻め滅ぼされたシャフリ・ゴルゴラの調査も課題の一つである。バーミヤーン滅亡に関わる遺跡であるとともに、貴重な年代的基準となりうる資料である。現在はまだ地雷が埋設されており、発掘調査に至るまでには時間を要するが、すでに骨董業者による盗掘被害が起きているようである。早急な手だてが必要であろう。

バーミヤーンの周辺地域との比較も今後の課題である。中央アジアにおける地域性を明らかにするとともに、共通する特質も明らかにしていかなければならない。

おわりに

2007 年 7 月 19 日にタリバンにより韓国人 23 人が拉致され、２名の犠牲者が出た。調査隊が帰国して 10 日も経たない時であった。この拉致事件以前においてもアフガニスタンについては退避勧告が出されていたが、カーブル、ジャララバード、ヘラート、マザリ・シャリフ、バーミヤーンの都市に限っては渡航延期の勧告にとどまっていた。しかし、拉致事件を契機に外務省はそれら５都市についても退避勧告に引き上げ、以後の現地ミッションは中止されている。陶磁器調査に関してはようやく緒についたばかりであり、課題が山積した中での調査の中断は残念ではあるが、今は治安の回復を祈るしかない。

引用文献・参考文献

山内和也，2007
『バーミヤーン遺跡保存事業概報　2006 年度（第６・７次ミッション）』アフガニスタン情報文化省、独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・奈良文化財研究所

岩井俊平・山内和也・小澤毅・田村晃一・高瀬尚人・渡辺丈彦・島田俊男・西山伸一・森本晋，2006
『バーミヤーンにおける考古遺跡の地下探査−2003 年および 2005 年の調査成果−』独立行政法人文化財研究所国際文化財保存修復強力センター。（西山 , 2003）

独立行政法人文化財研究所，2005
『世界遺産バーミヤーン遺跡を守る』独立行政法人文化財研究所

樋口隆康・宮地昭・西川幸治・桑山正進・山田明爾・牛川喜幸，1983-84
『バーミヤーン－京都大学中央アジア学術調査報告－』全４巻、同朋社出版。桑山正進「バーミヤーンに関する中国及びイスラーム資料」211-217.

山内和也・谷口陽子・岩井俊平・中村俊夫・宮地昭，2006『バーミヤーン仏教壁画の編年』
独立行政法人文化財研究所国際文化財保存修復強力センター・国立大学法人名古屋大学名古屋大学博物館

桑山正進，1985
「バーミヤーン大仏成立にかかわるふたつの道」『東方学報』京都第 57 冊、109-209.

桑山正進訳 , 1987
『大乗仏典〈中国・日本篇〉９　大唐西域記』中央公論社

桑山正進編 , 1992
『慧超往五天竺国伝研究』京都大学人文科学研究所

前田耕作，2005
「バーミヤーンイスラームとその歴史」『バーミヤーンイスラームの歴史と保存』独立行政法人文化財研究所国際文化財保存修復協力センター、33-38.

Baker,P H F, and Allchin, F R, 1991,
Shahr-I Zohak and the history of the Bamiyan Valley Afghanistan, (BAR International Series 570), Oxford.

Berre M., 1987,
Monuments Pré-islamiques de l'Hindukush Central, Mémoires la délégation archéologique Francaise, Tome XXIV, Éditions Recherche sur les Civilisations, Paris.

Griffith,w., 1847,
Journals of Travels, ed. J.Mac-Clelland. Calcutta.

Klimburg-Salter, D., 1989,
The Kingdom of Bamiyan: Buddhist Art and Culture of the Hindu Kush,Naples and rome: Istiuto Universitario Orientale and Istituto Italiano per il Medio ed Estremo Oriente.

Raverty,H.G., 1881,
Tabakat-i-Nasiri, Translation of Juzjani, London.

Tarzi, Z., 2005,
Investigation Archéologique Récente par l'Équipe Française au Site de Bamiyan,Preserving Bamiyan, Japan Center for International Cooperation in Conservation, National Research Institute for Cultural Properties, Japan (ゼマルヤライ・タルズィー「フランス隊によるバーミヤーン遺跡の発掘調査：その最新の成果」『バーミヤーン遺跡の歴史と保存』独立行政法人文化財研究所国際文化財保存修復協力センター、100-113.

Watson, O., 2004,
Ceramics from Islamic Lands, London, Thames and Hudson.

（単位：g）

分類No.		種類	器種	Taibuti		Gharibabad		Qazi Dauti		Ju-yi Shahr	
1	化粧土なし	緑褐彩陶器・三彩		0	**0.0%**	104	**2.2%**	0	0.0%	0	**0.0%**
2		黄釉陶器		0	**0.0%**	30	**0.6%**	0	0.0%	0	**0.0%**
3		褐釉陶器		0	**0.0%**	42	**0.9%**	0	0.0%	0	**0.0%**
4		褐釉彩画陶器		109	**3.1%**	172	**3.6%**	15	0.3%	10	**0.1%**
5		黒釉彩画陶器		137	**3.9%**	23	**0.5%**	0	0.0%	0	**0.0%**
6	白化粧土	緑釉陶器（刻線なし）		317	8.9%	347	7.2%	530	9.2%	245	**1.4%**
7		緑釉陶器（刻線有）	碗・鉢								
8		緑釉陶器（刻線有）	坏								
9		緑釉陶器（刻線有）	壷								
10		緑釉陶器（刻線有）	瓶	207	**5.8%**	865	18.0%	1022	17.8%	2580	14.4%
11		黄釉陶器		124	3.5%	177	3.7%	413	7.2%	684	3.8%
12		褐釉、多色釉、青釉		239	6.7%	252	5.2%	315	5.5%	185	1.0%
13		黒釉彩画陶器		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
14		透明釉下彩文・多彩釉彩画		1506	**42.5%**	999	20.8%	1064	18.5%	93	**0.5%**
15		多彩釉刻線文		815	**23.0%**	1352	**28.1%**	2176	**37.8%**	11918	**66.7%**
16		多彩釉盛上文									
17		透明釉	壷								
18		透明釉	彩	0	0.0%	92	1.9%	0	0.0%	65	0.4%
19		多彩釉彩画（中央アジア）		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%
20		青釉（白色素地）	碗・鉢・盤								
21		青釉（白色素地）	小壷	50	1.4%	23	0.5%	44	0.8%	49	0.3%
22		白釉（白色素地）		0	0.0%	15	0.3%	0	0.0%	9	0.1%
23	ラスター彩	ラスター彩		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	25	0.1%
24	ストーンペースト	青釉（ストーンペースト）		0	0.0%	*3*	*0.1%*	5	0.1%	24	0.1%
25		白釉（ストーンペースト）		0	0.0%	*82*	*1.7%*	0	0.0%	65	0.4%
26		その他の施釉陶器		33	0.9%	113	2.3%	75	1.3%	103	0.6%
27	タイル	緑釉タイル		0	0.0%	120	2.5%	0	0.0%	1317	7.4%
28		黄釉・青釉・多釉タイル		0	0.0%	0	0.0%	0	0.0%	500	2.8%
29		その他		10	0.3%	0	0.0%	93	1.6%	2	0.0%
				3547	100.0%	4811	100.0%	5752	100.0%	17874	100.0%

陶磁器	施釉陶器	透明釉	黄色素地粗	白化粧土無	鉢	彩文（緑褐彩陶器・三彩）	1
	施釉陶器	黄釉	赤色素地	化粧土無	碗・鉢	無文（黄釉陶器）	2
	施釉陶器	褐釉	赤色素地	化粧土無	碗・鉢	無文（褐釉陶器）	3
	施釉陶器	褐釉	赤色素地	化粧土無	碗・鉢	彩文（褐釉彩画陶器）	4
	施釉陶器	黒釉	赤色素地	化粧土無	碗・鉢	彩文（黒釉彩画陶器）	5
	施釉陶器	緑釉	赤色素地	白化粧土	碗・鉢	無文（緑釉陶器）	6
		緑釉	赤色素地	白化粧土	碗・鉢	刻線文（緑釉刻線文陶器）	7
					坏	刻線文・無文	8
					壺	刻線文・無文	9
					瓶	刻線文・無文	10
	施釉陶器	黄釉	赤色素地	白化粧土	碗・鉢	無文（黄釉陶器）	11
	施釉陶器	褐釉他	赤色素地	白化粧土			12
	施釉陶器	黒釉	赤色素地	白化粧土	碗・鉢	彩文（黒釉彩画陶器）	13
		透明釉	赤色素地	白化粧土	碗鉢皿	彩文（透明釉下彩文陶器・多彩釉彩画陶器）	14
						彩文・刻線文（多彩釉刻線文陶器）	15
						盛上・貼付文（多彩釉盛上文陶器）	16
					壺	彩文	17
					瓶	彩文	18
	透明釉	透明釉	赤？素地	白化粧土	碗・鉢	彩文（多彩釉彩画陶器中央アジア）	19
	施釉陶器	青釉	白色素地	化粧土無	碗鉢盤	無文（青釉陶器）	20
					小壺	無文	21
	施釉陶器	白釉	白色素地	化粧土無		無文（白濁釉陶器）	22
	施釉陶器	透明釉	stonepaste	化粧土無	碗・鉢	彩文（金色ラスター彩陶器）	23
	施釉陶器	青釉	stonepaste	化粧土無	碗鉢皿	型文（青釉型文陶器）	24
	施釉陶器	白釉	stonepaste	化粧土無	碗・鉢	型文（白濁釉型文陶器）	25
	施釉陶器	その他					26
	施釉タイル	緑釉	赤色素地			無文（緑釉タイル）	27
	施釉タイル	黄釉	赤色素地			無文（黄釉タイル）	28
	その他						29

陶磁器	無釉土器	赤色素地	白化粧土	鉢	無文
		赤色素地	化粧土無	壺・瓶	彩文
		赤色素地		壺・瓶	刻線文
		赤色素地		鉢	無文
		赤色素地　精		瓶	無文
		赤色素地　精		瓶	刻線文
		赤色素地　精	白化粧土	瓶	無文
		赤色素地　粗	化粧土無	壺・甕	無文
		赤色素地　粗	化粧土無	鍋壺	無文
		白色素地	白化粧土	鉢	無文
		白色素地	化粧土無	鉢	無文
		灰色素地	化粧土無	鉢	無文

窯道具	
棚棒	赤色素地
三足トチン	赤色素地

Tab.1　バーミヤーン遺跡出土の陶磁器分類一覧表及びイスラーム陶器重量表（右列の数字は分類番号）

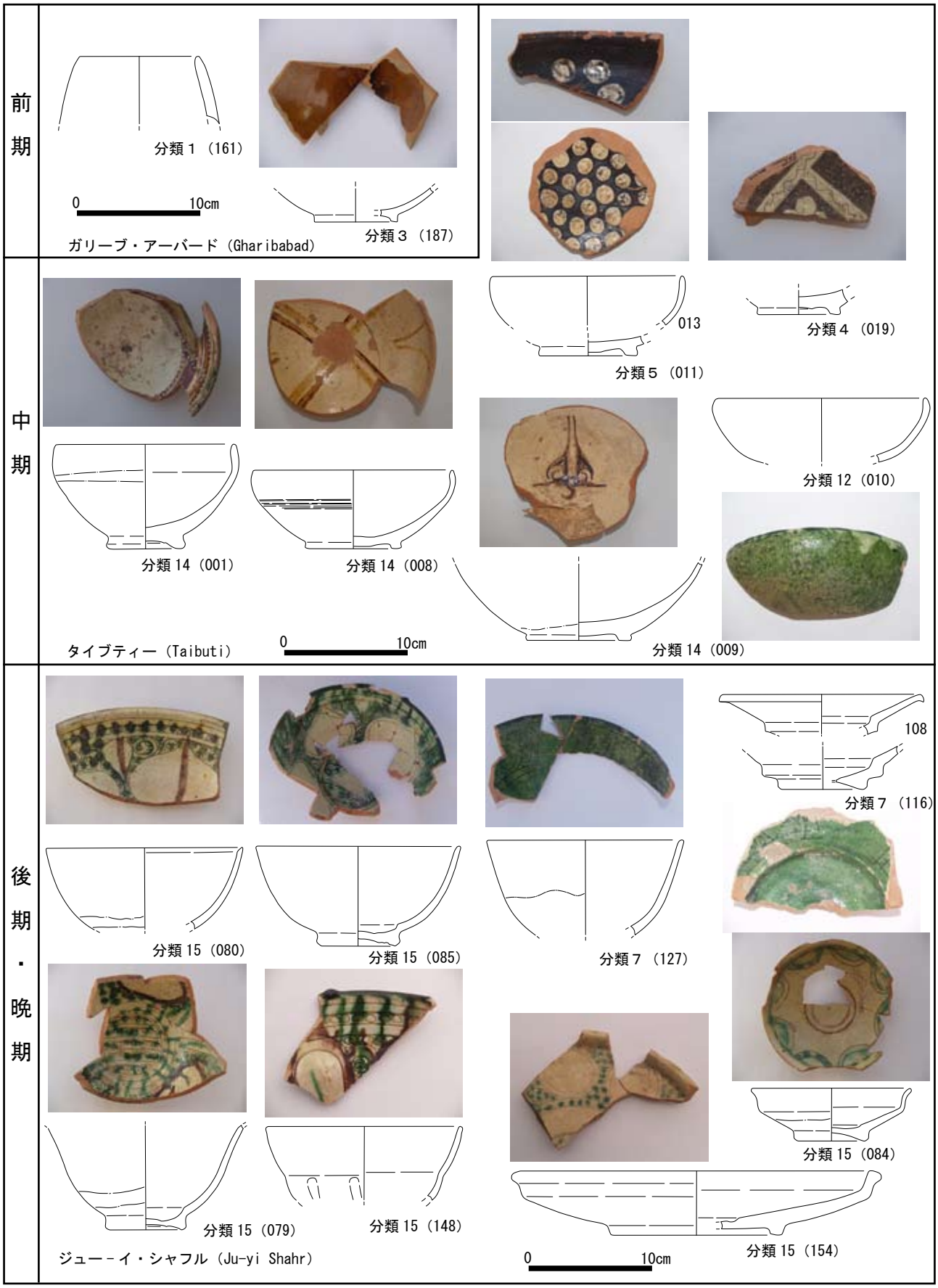


Figure 3　バーミヤーン遺跡出土イスラーム陶器編年試案

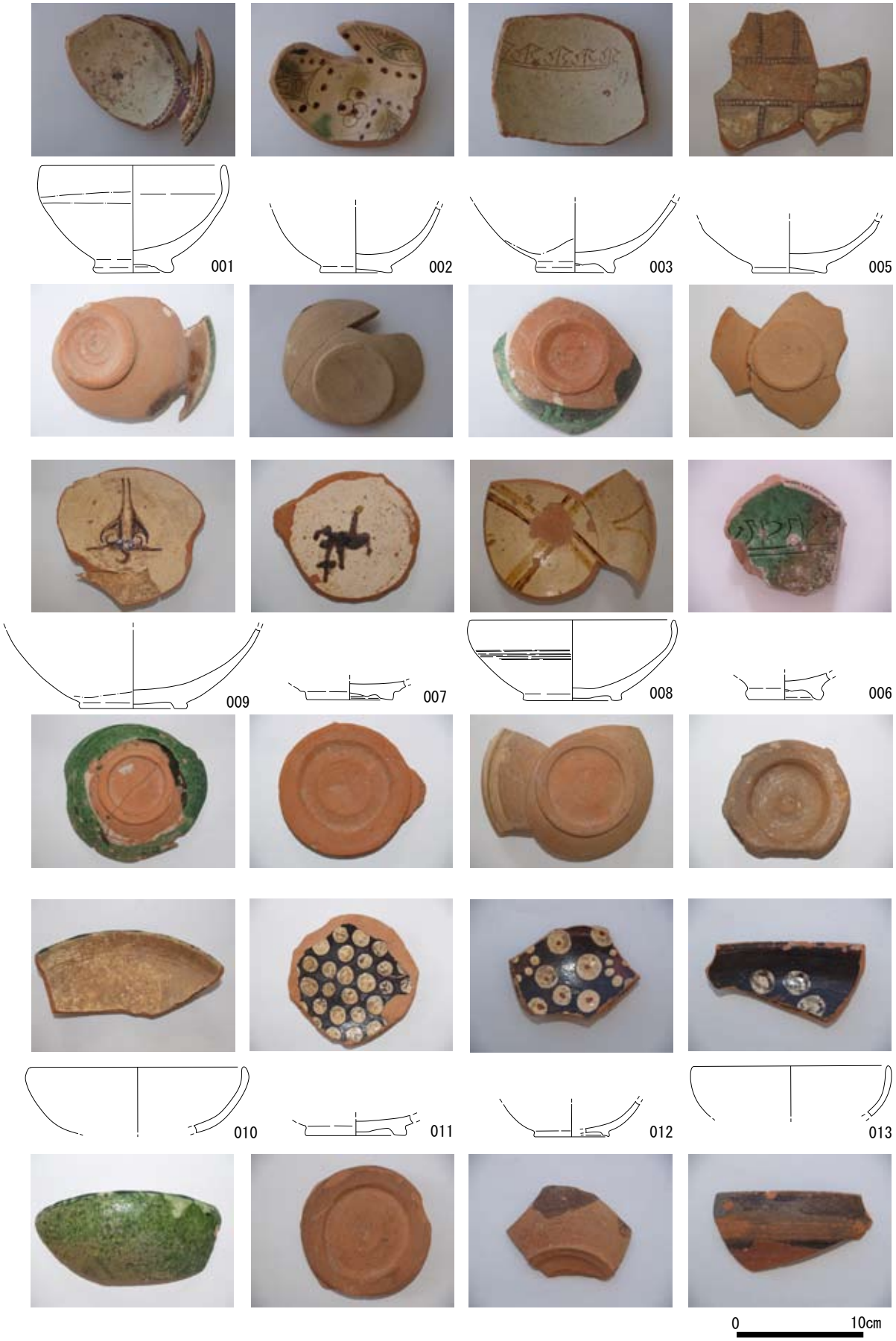


Figure 4　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（1）

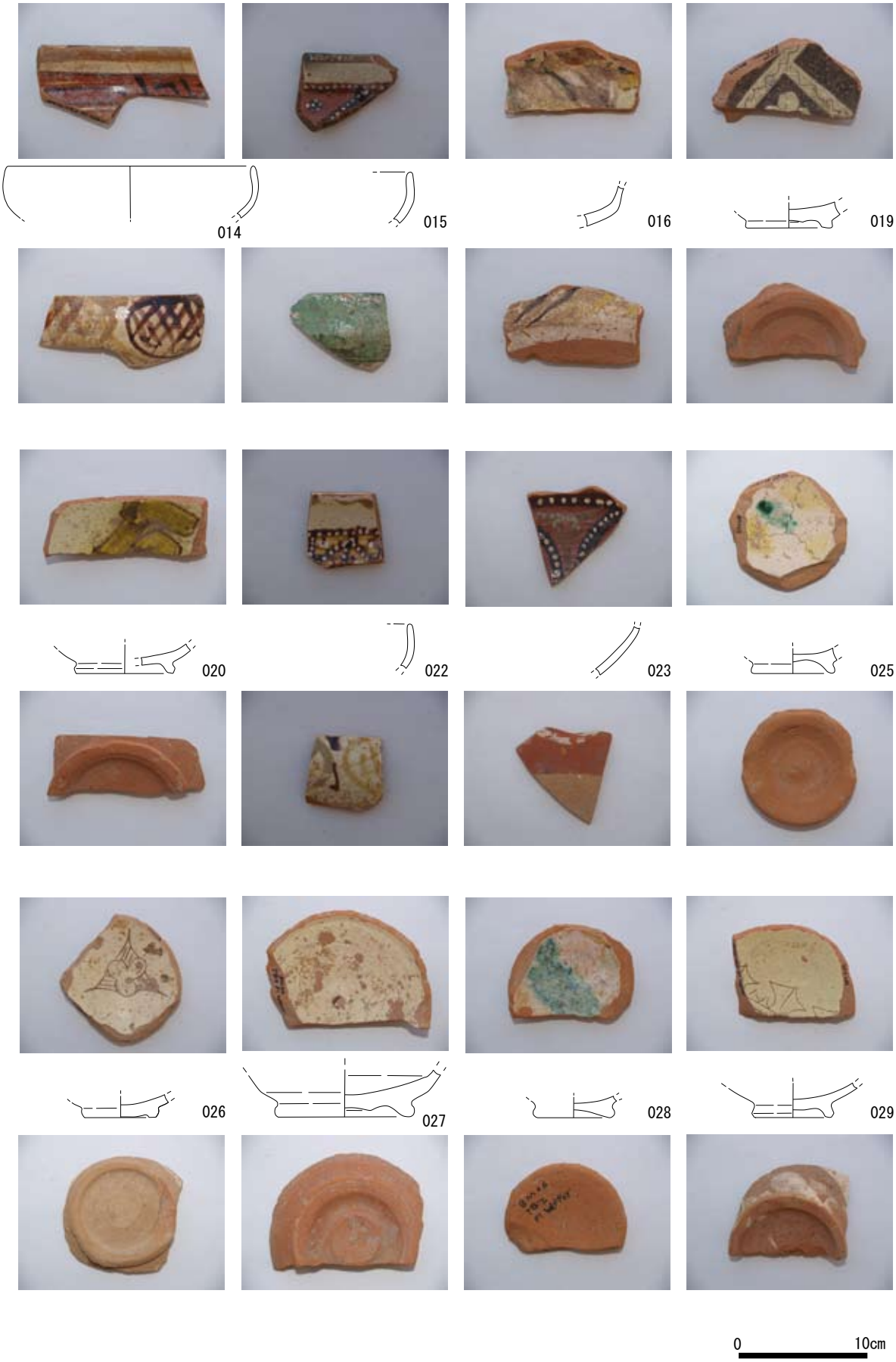


Figure 5　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（2）

Figure 6　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（3）

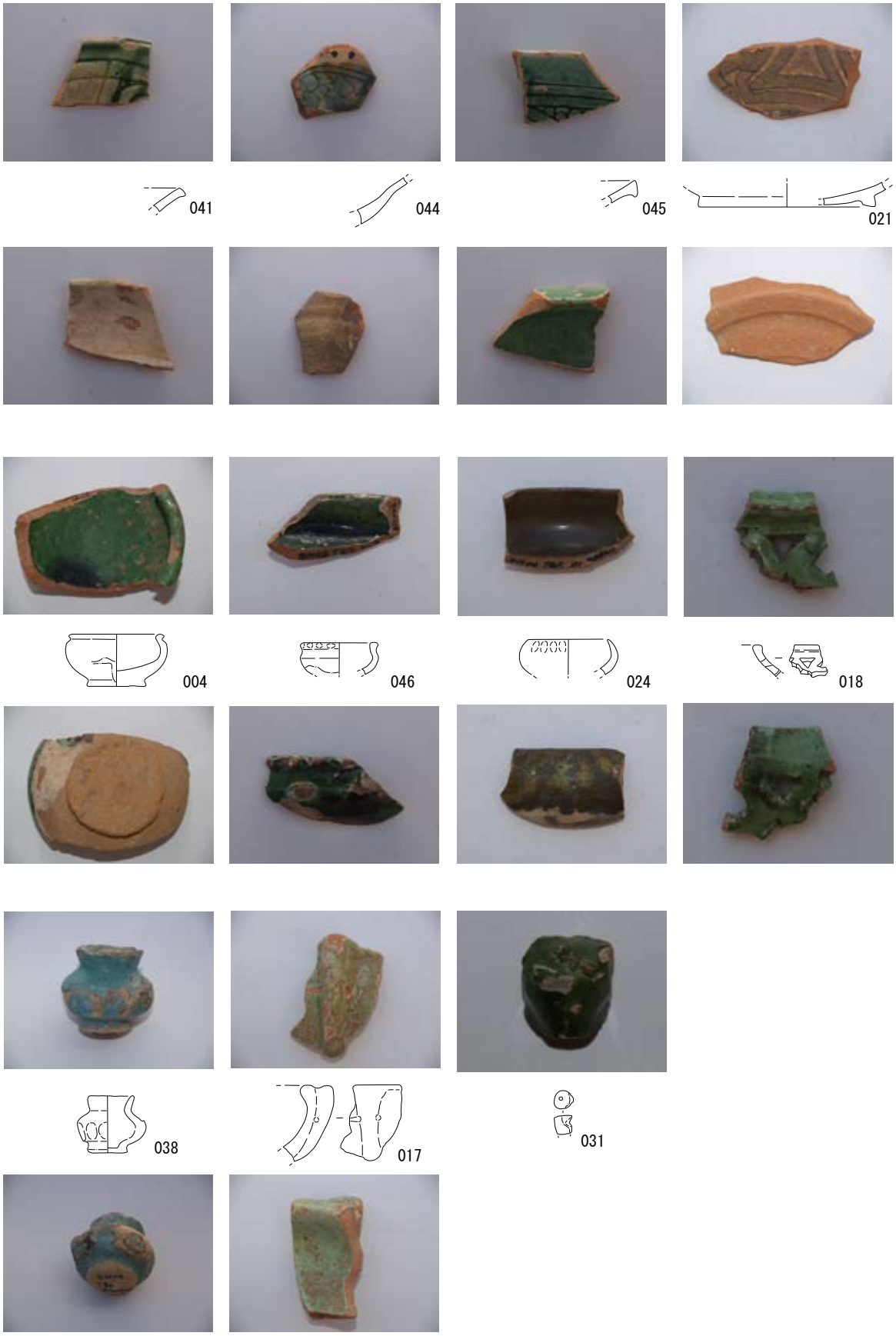


Figure 7　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（4）

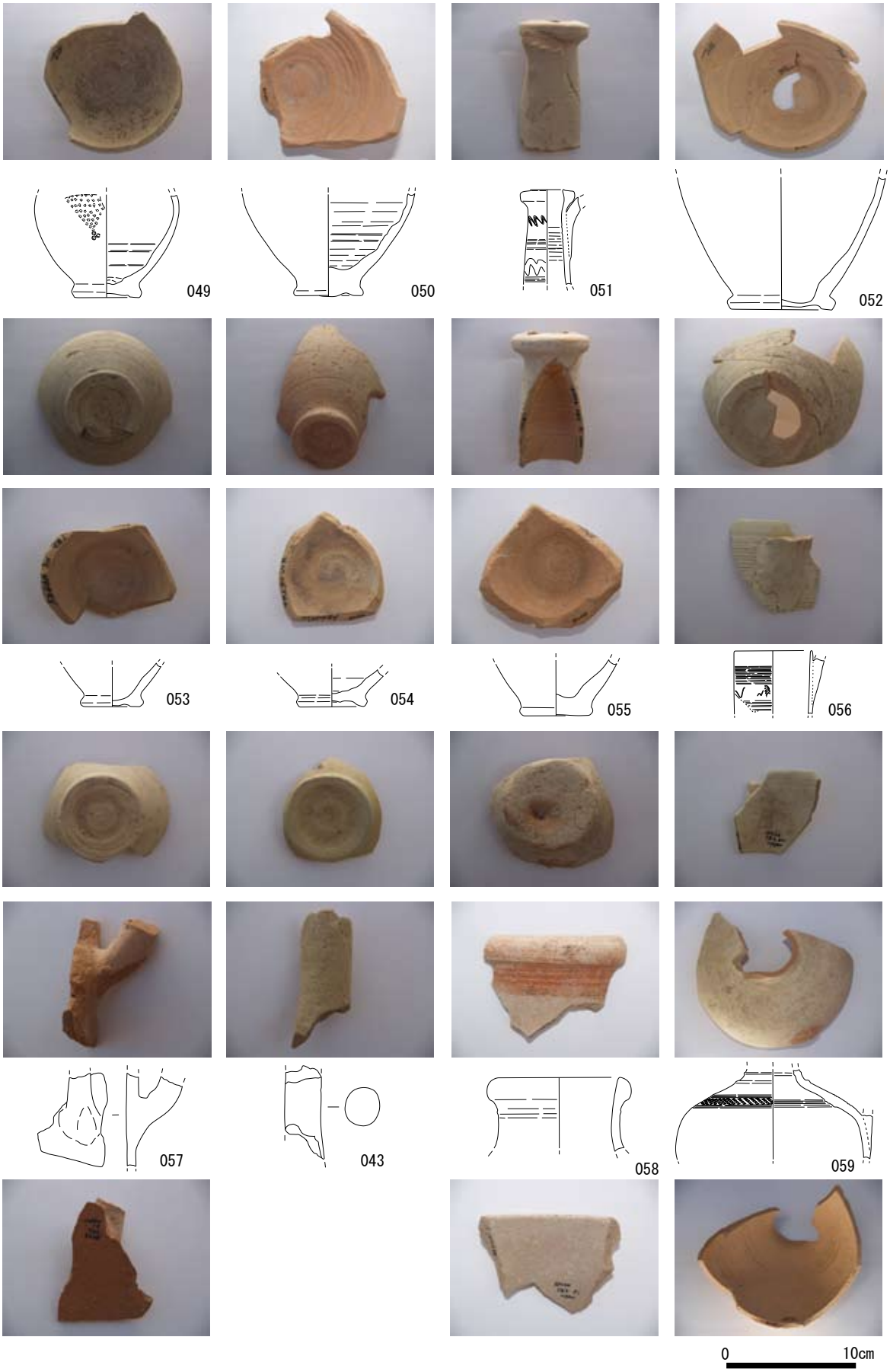


Figure 8　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（5）

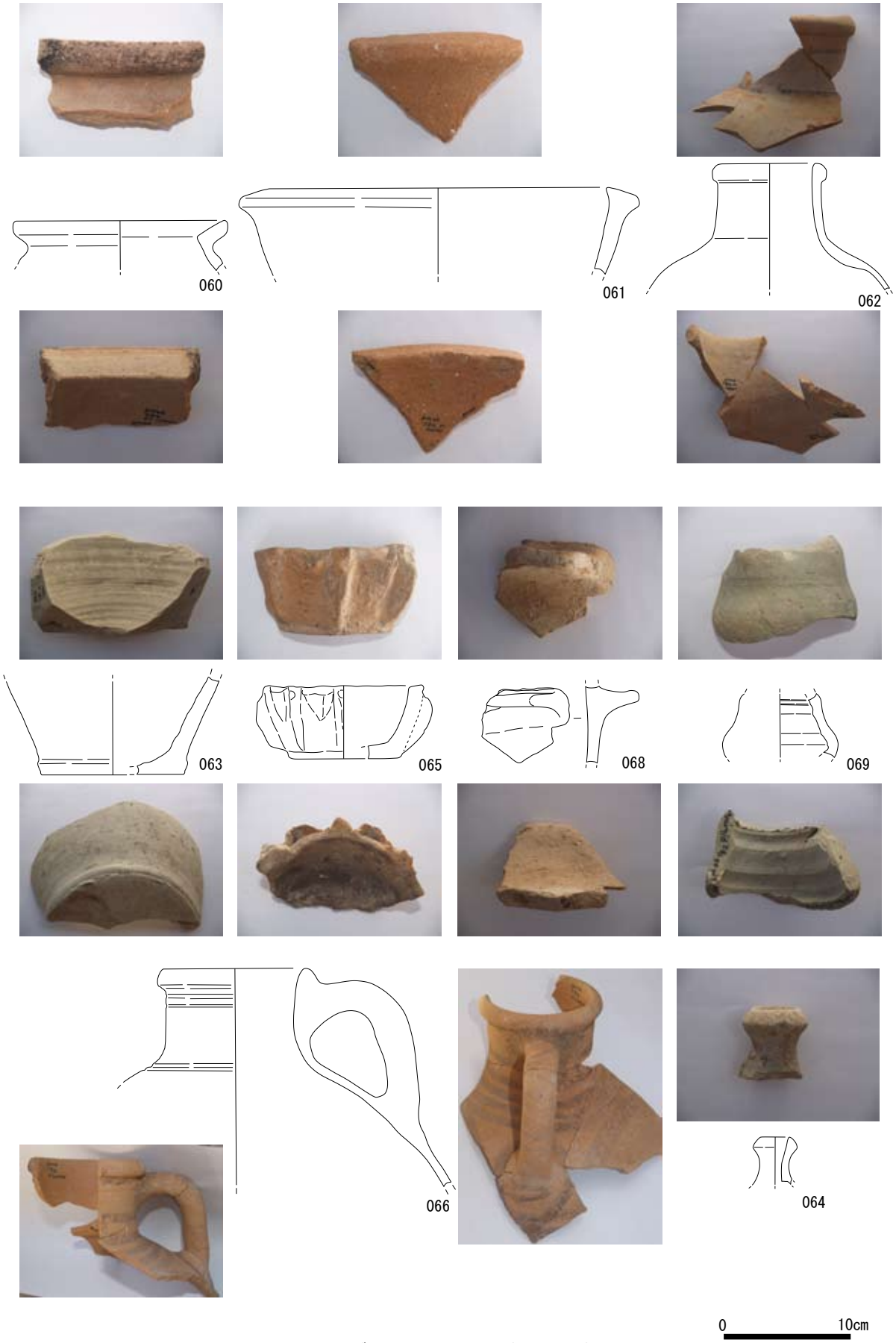


Figure 9　タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（6）

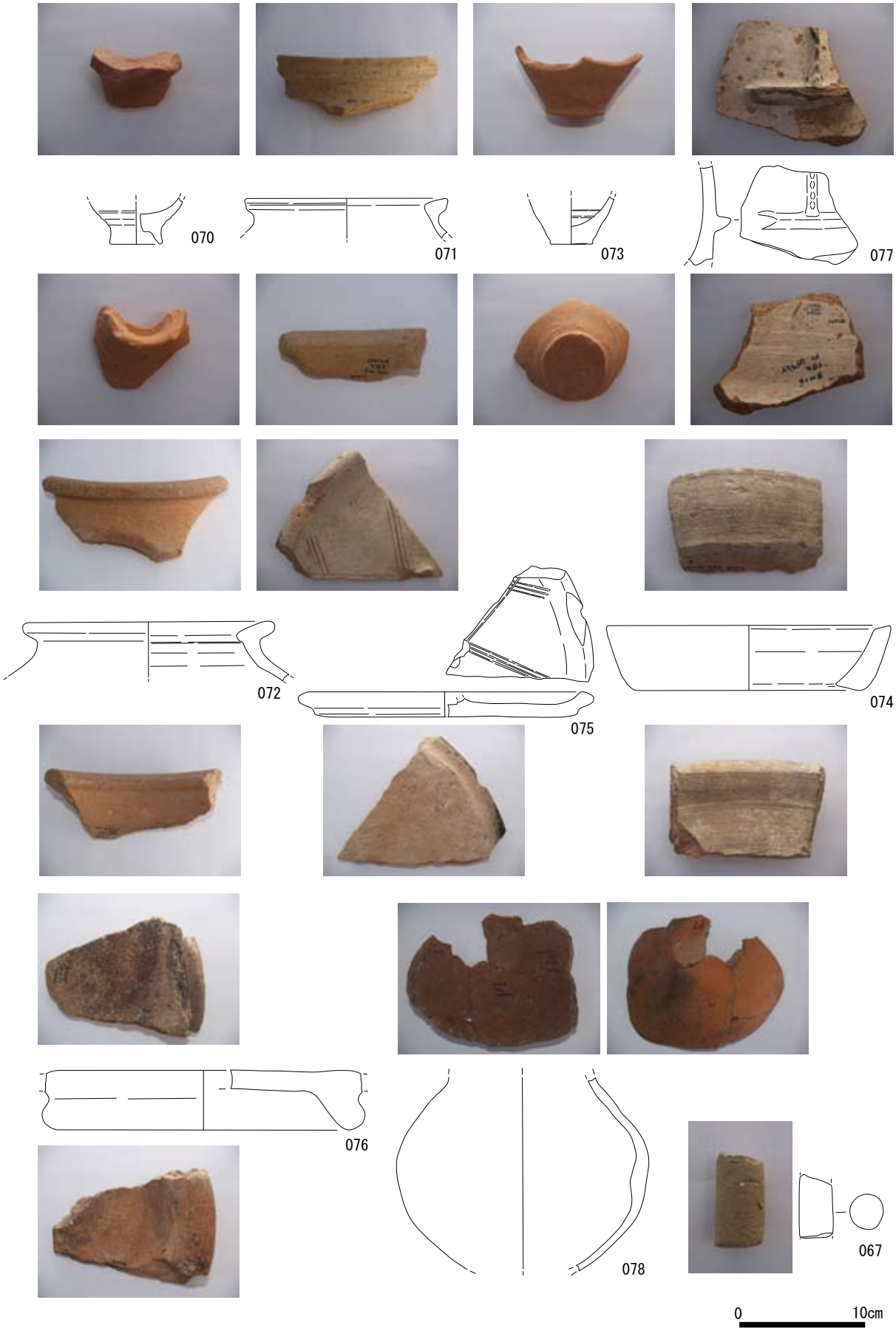


Figure 10 タイブティー（Taibuti）遺跡出土遺物（7）

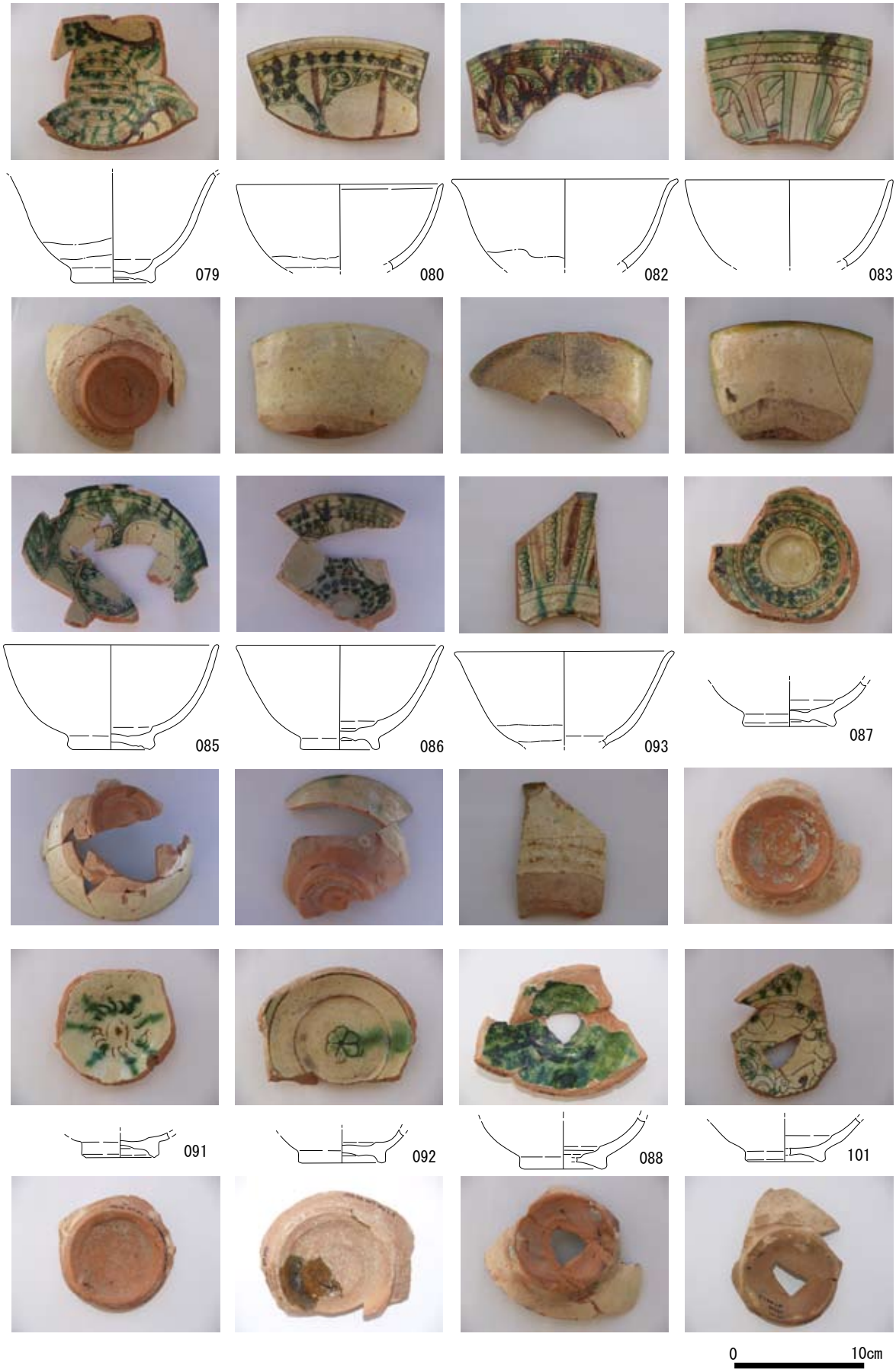


Figure 11 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（1）

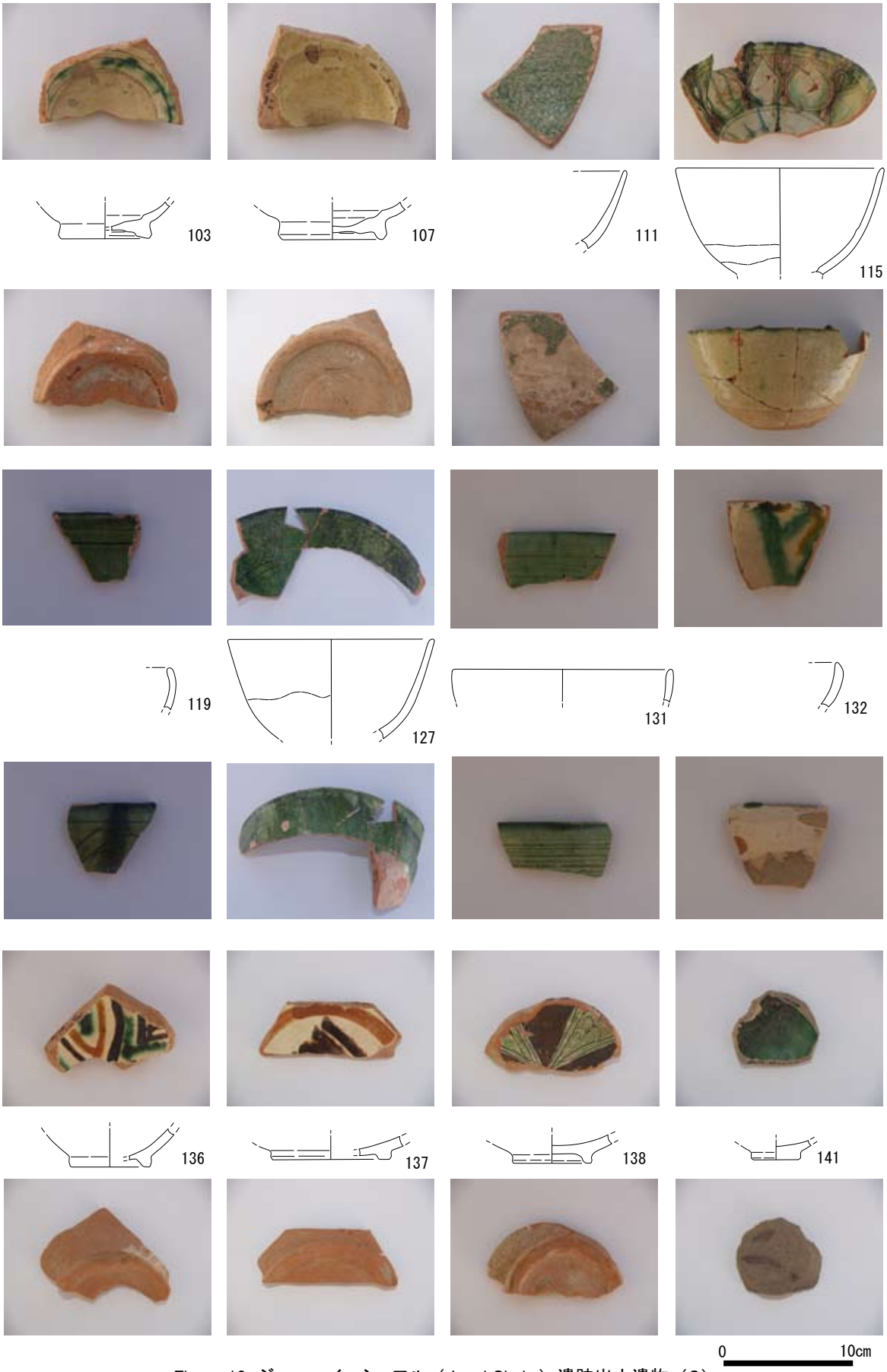


Figure 12 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（2）

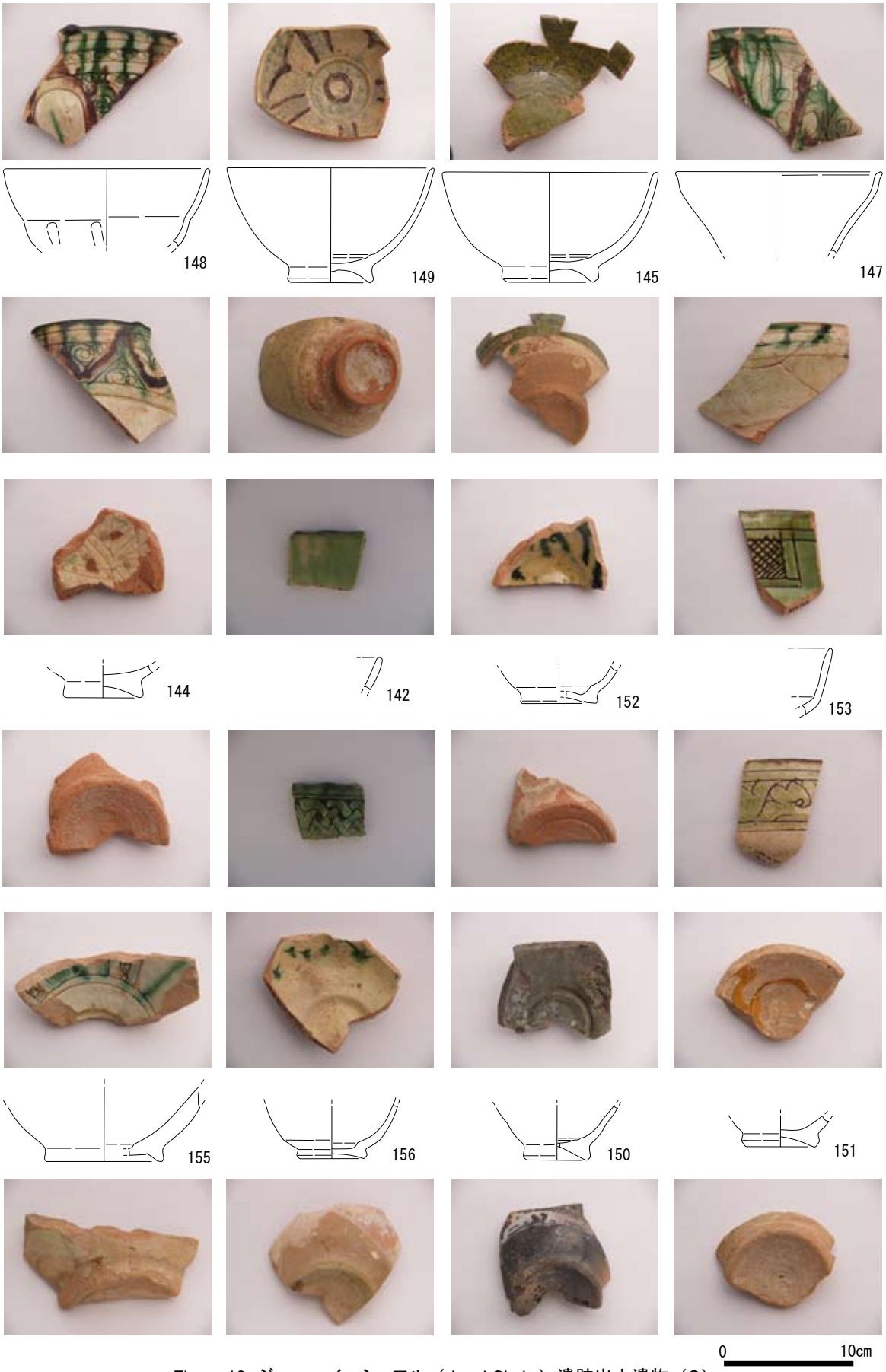


Figure 13 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（3）

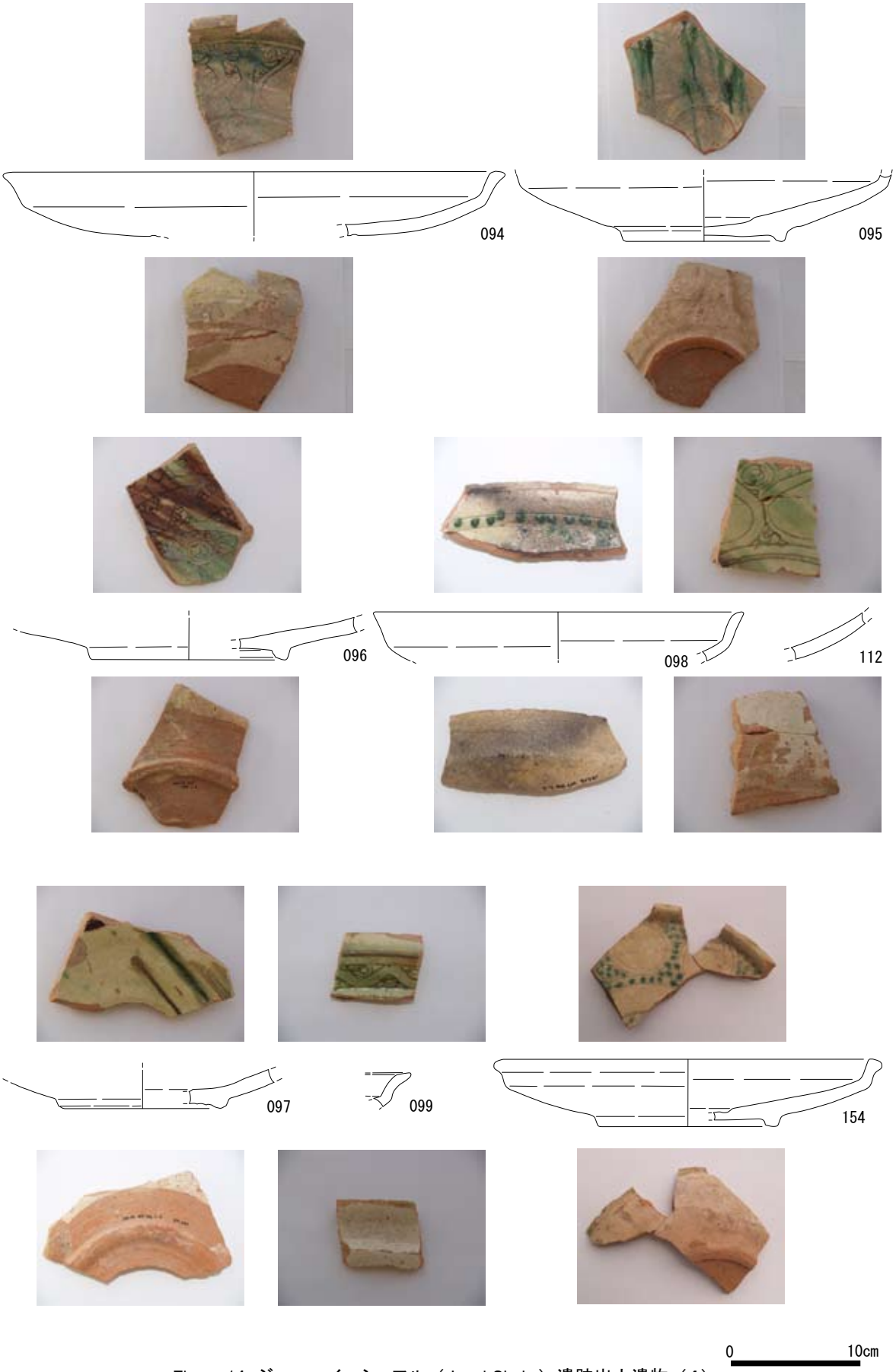


Figure 14 ジューイ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（4）

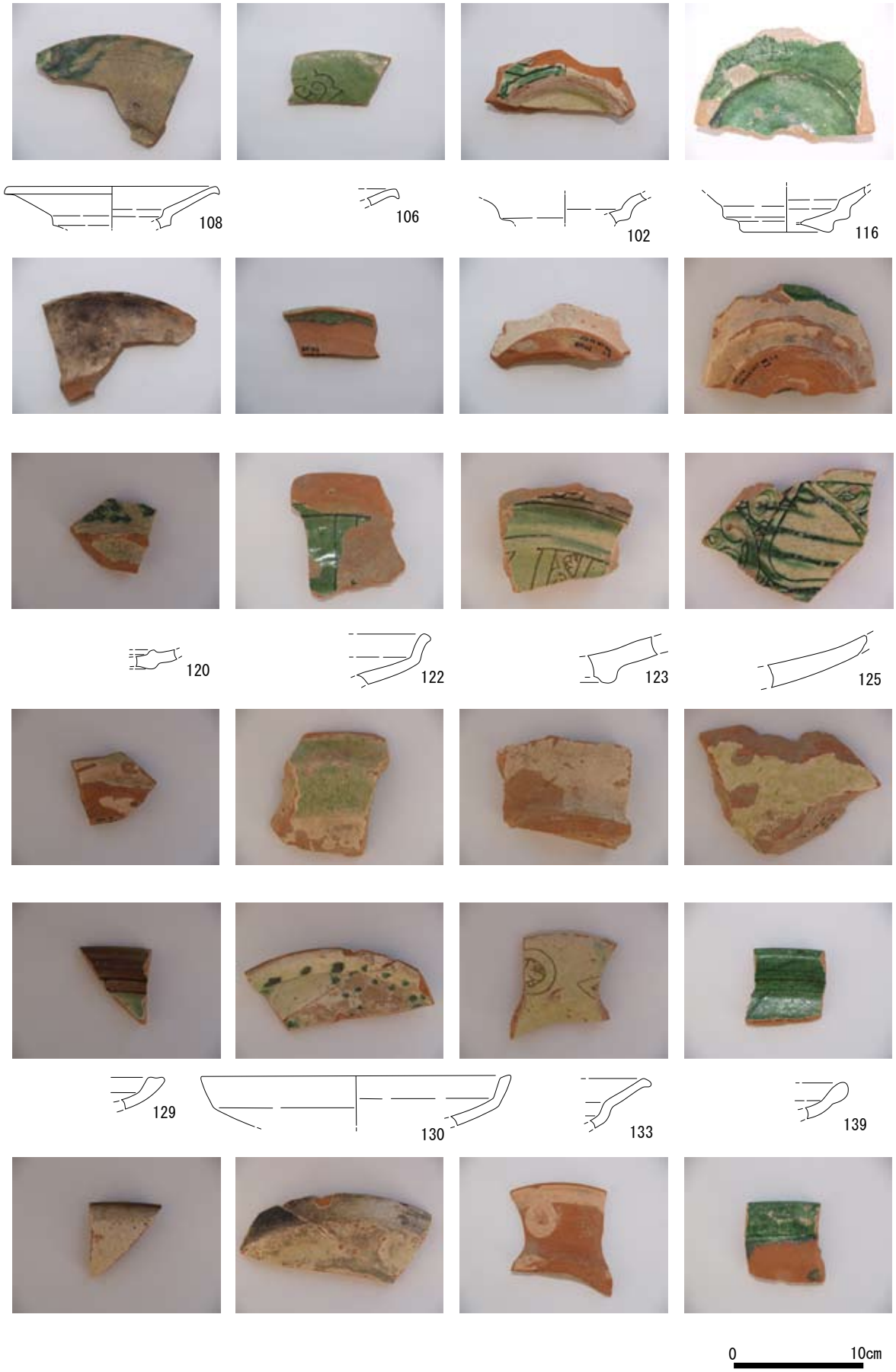


Figure 15 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（5）

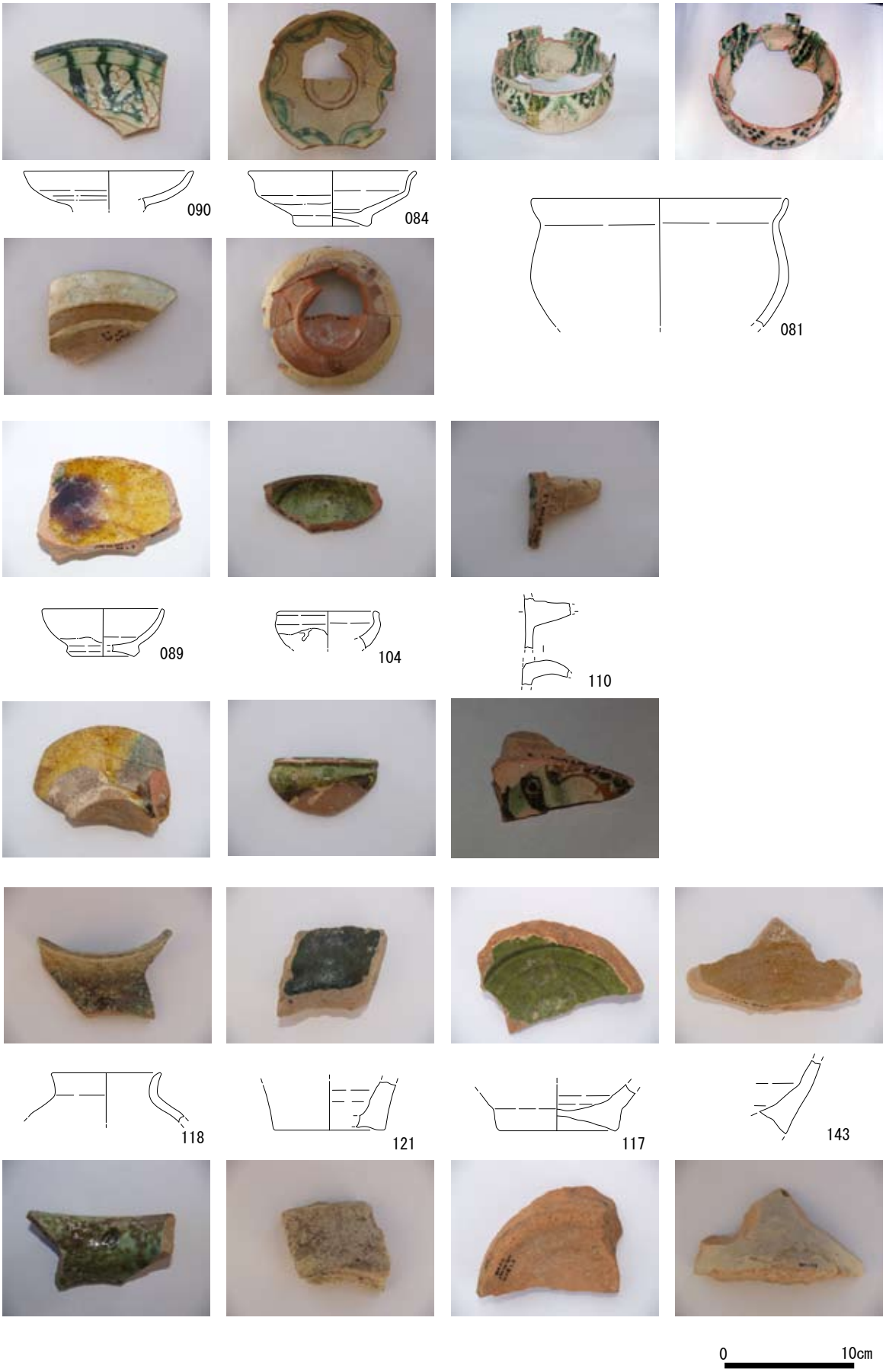
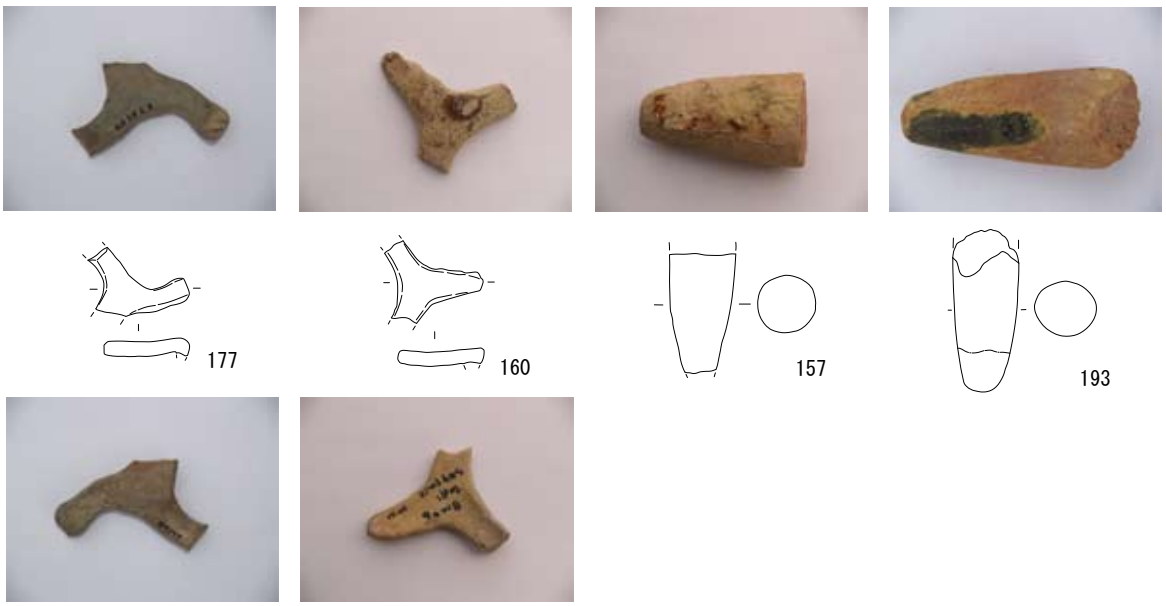


Figure 16 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（6）

Figure 17 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（7）

Figure 18 ジュー－イ・シャフル（Ju-yi Shahr）遺跡出土遺物（8）



0　10cm

Figure 19 ガリーブ・アーバード（Gharibabad）遺跡出土遺物（1）

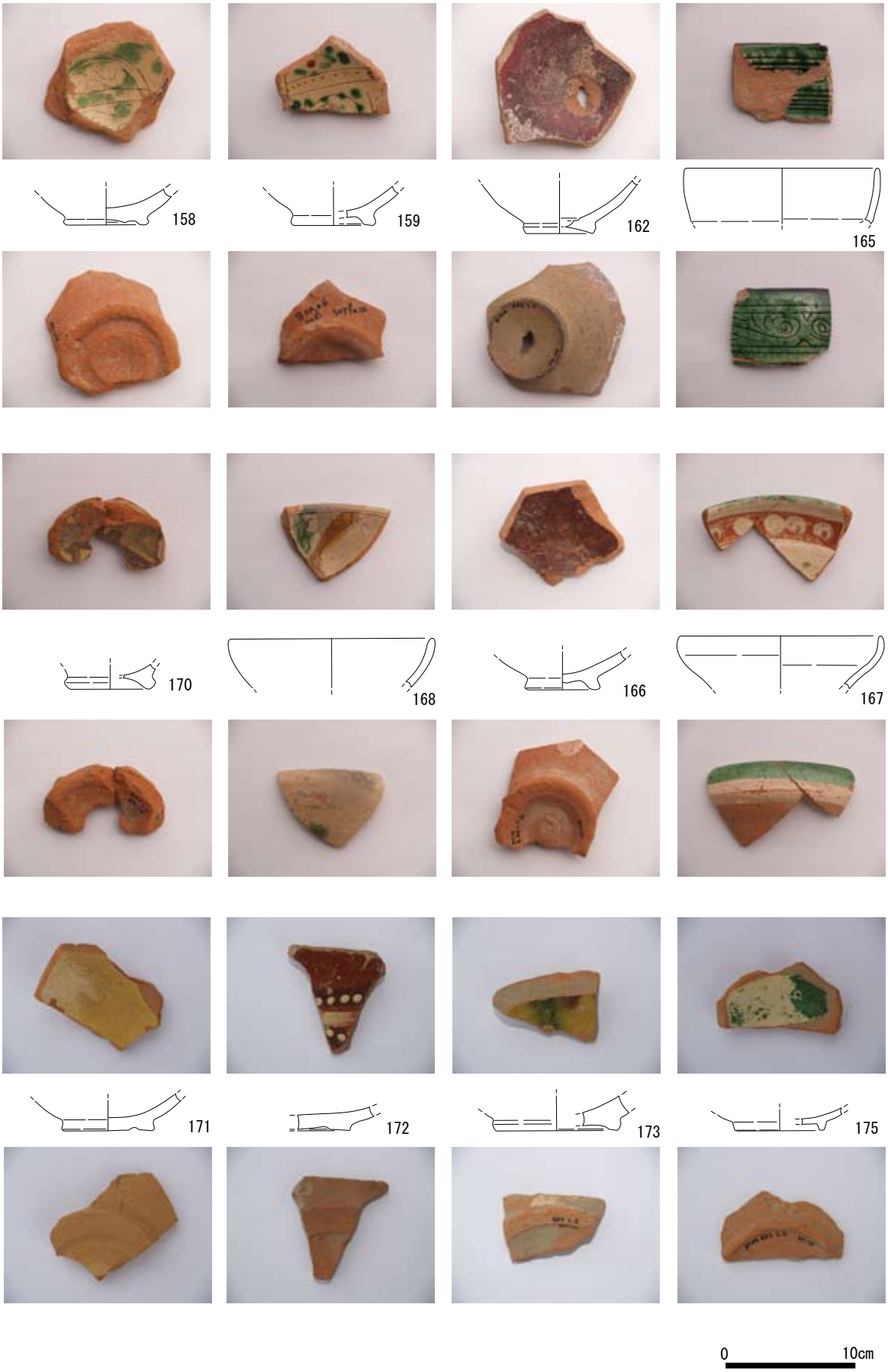


Figure 20 ガリーブ・アーバード（Gharibabad）遺跡出土遺物（2）

Figure 21 ガリーブ・アーバード（Gharibabad）遺跡出土遺物（3）

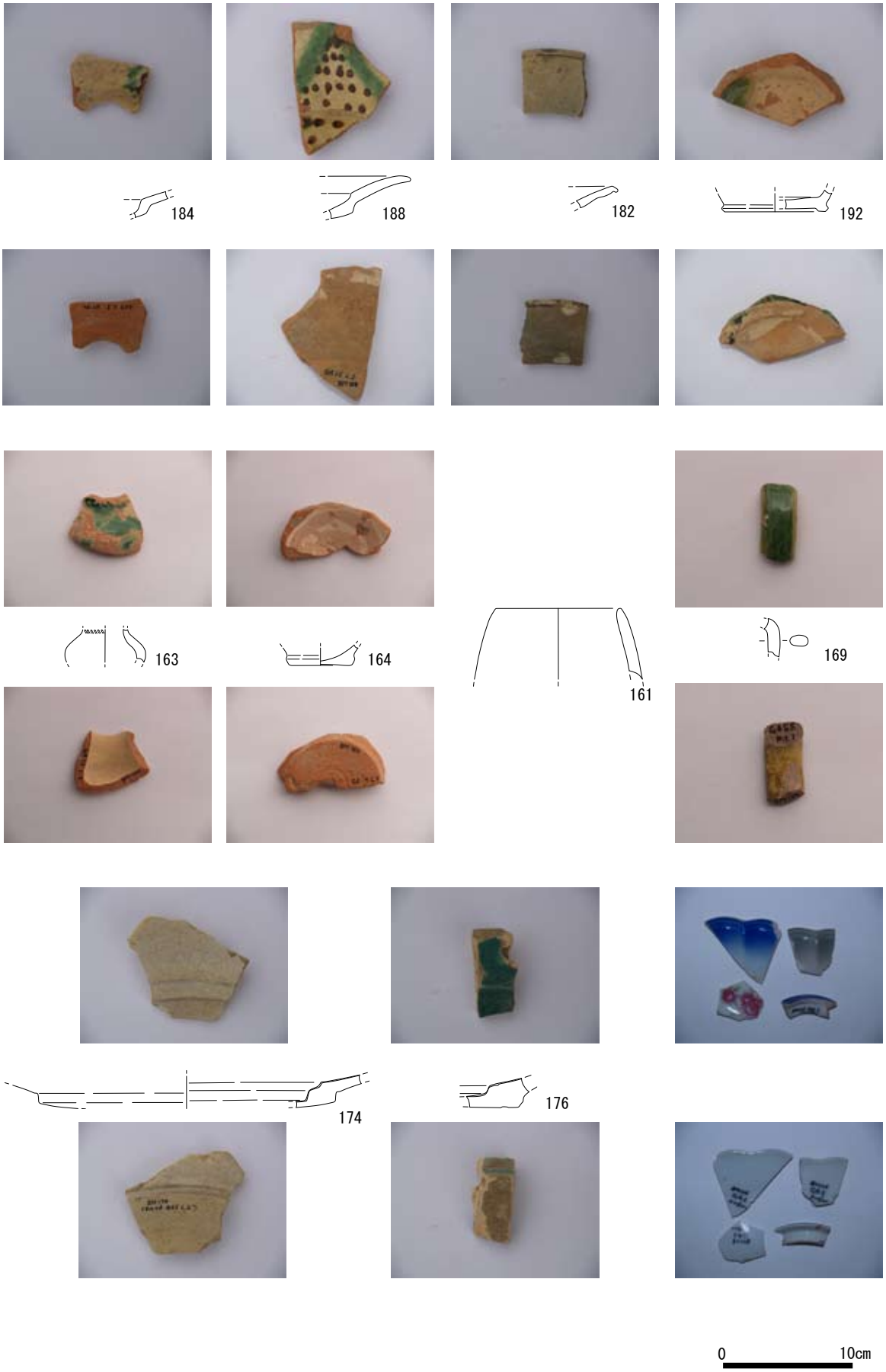


Figure 22 ガリーブ・アーバード（Gharibabad）遺跡出土遺物（4）

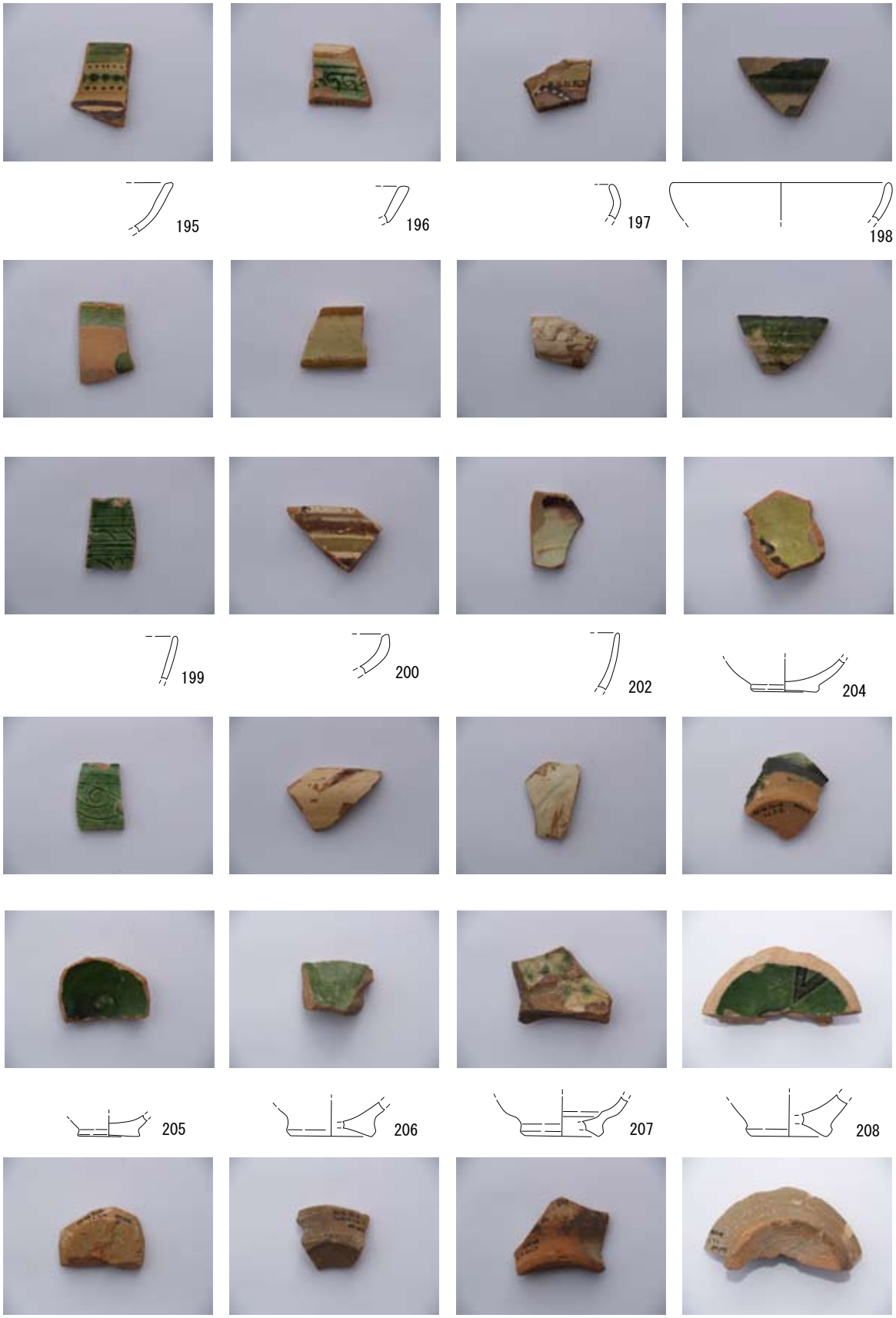


Figure 23 ガーズィー・ダウーティー（Qazi Dauti）遺跡出土遺物（1）

Figure 24 ガーズィー・ダウーティー（Qazi Dauti）遺跡出土遺物（2）

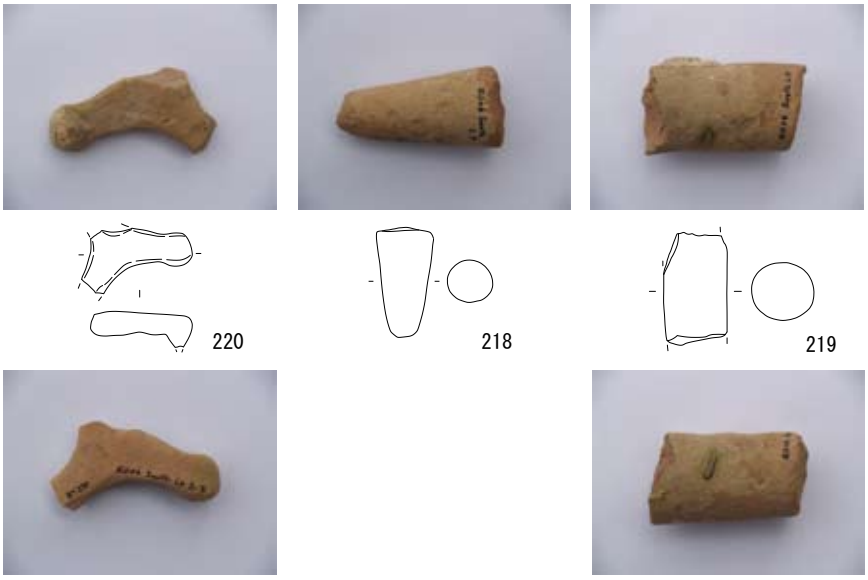


Figure 25 ガーズィー・ダウーティー（Qazi Dauti）遺跡出土遺物（3）

Figure 26 バーミヤーン遺跡出土遺物（石窟周辺）